

【まとめ】腸恥滑液包炎は比較的稀な疾患であるが大腸ヘルニアの鑑別として念頭におくべき疾患と考え報告した。

36 抗血栓療法中に発生した非外傷性腹直筋血腫の一例

宗岡 克樹 (新津医療センター 病院外科)
白井 良夫 (新潟大学第1外科)
藤村 夏美・佐藤 英司 (新津医療センター 病院内科)
須田 剛士

抗血栓療法中に発生した非外傷性腹直筋血腫の一例を経験したので報告する。症例は71歳男性で真性多血症にて、抗血栓療法施行中に、腹痛と腹部腫瘤が突如出現し、当科に入院となった。CTで腹直筋に一致する high density な腫瘤像を認めた。特徴的なCT像と急激な発症経過から、抗血栓療法が誘因となり発症した非外傷性腹直筋血腫と診断された。高度な疼痛、進行性の貧血のため、局麻下にドレナージ術を施行した。非外傷性腹直筋血腫の本邦報告例は116例であり、抗血栓療法中に発症した症例は9例である。抗血栓療法中に突如出現し増大する有痛性腹部腫瘤を見た場合、腹直筋血腫を念頭におくべきである。

37 鈍的腹部外傷における診断的腹腔洗浄法(DPL)の有用性について

佐藤 友威・斎藤 英樹
山本 陸生・片柳 憲雄
大谷 哲也・桑原 史郎
平野 謙一郎・藍沢 修 (新潟市民病院外科)
広瀬 保夫・山崎 芳彦 (同 救命救急センター)
木下 秀則・田中 敏春

近年、鈍的腹部外傷に於いて肝損傷、脾損傷などの実質臓器損傷では緊急手術の適応が少なくなっているが、通常腸管損傷は緊急開腹手術の絶対適応である。画像診断の進歩により、実質臓器損傷の診断は比較的容易になったものの、腸管損傷の早期診断は未だ容易ではない。DPLは米国で広く行われている腹部外傷の診断方法である。当院では1996年4月よりDPLを導入し、2001年9月

まで46例の鈍的腹部外傷に対し実施した。腸管損傷を合併していた15例全例で陽性所見を認めた。鈍的腹部外傷に対して、DPLは腸管損傷の診断に有効な方法である。

38 閉腹時の創面消毒は必要か—5施設協同検討

田宮 洋一・親松 学 (県立吉田病院)
村山 裕一・林 達彦 (厚生連村上病院)
下田 聡・武田 信夫
小山俊太郎・田中 典生 (県立新発田病院)
富山 武美 (厚生連豊栄病院)
筒井 光廣・佐藤 賢治 (厚生連佐渡病院)

【目的】閉腹時の創面消毒の術後創感染防止効果を検討する。

【対象・方法】5施設の大腸がん症例87例を閉腹時にイソジン(PI群)と生食(生食群)を使用する2群に分けて創感染率を比較した。予防的抗生剤、剃毛、開腹前皮膚消毒などできるだけ条件を統一した。

【結果】本年5月までの集計結果であるが、創感染率はPI群が21.7%(5/23例)、生食群が16.7%(4/24例)と両群で有意差がなかった。

【まとめ】閉腹時の創面消毒剤の術後創感染防止効果は確認できなかった。10月末までの手術例を集計し発表する。

39 周術期におけるセラチア感染症(血流感染)に関するアンケート調査報告—I

黒崎 功・畠山 勝義 (新潟大学 第一外科)

近年、カテーテル感染や血流感染を主体としたセラチア感染症がMRSAや結核などと並んで社会問題となってきている。院内感染による場合がクローズアップされているが、必ずしも集団発生するとは限らず、外科治療の周術期にも突発性に発症することが知られてきた。特に今まであまり危険視されてこなかった末梢輸液ルートが発生母地となることがあり、また一旦発症すると僅か数日で死亡するなど非常に劇的な経過を辿ることがある。